

中村武羅夫

内田魯庵氏



内田魯庵氏



初め二三度行つて不在であつた。魯庵氏は文壇の元老である。或は吾等如き後進に面会するのがうるさいので、居留守を使つて体の好い門前払いを食わせられるのであるまいか、会うのが面倒なら、正直に面倒であると言つて貰えば、何も強いて其上押して会つてくれとは言わぬ。居留守を使うなどと云ふことは不都合至極であると、少なからず憤慨したものである。

余の魯庵氏に会つたのは丁度四度目であつたと記憶す

る。取次に出た女中に来意を告げて、面会の栄を得たいと頼んだ。女中は二階へ上って行つたが、旋て足音軽く降りて来て「どうぞお上りなすツて……」と云う。女中の後に随いて案内されたのは、二階の六畳である。襖一室隔てて次の室が魯庵氏の書斎だ。与えられた坐布団に坐つて待つて居ると、直ぐ出て来られたのが魯庵氏である。余は其人を一目見て、自らの不明を衷心耻じた。魯庵氏は決して居留守を使うが如き人でない。先に訪問して不在であつたのは、折悪しく三度とも全くの不在であつたのだらう。

年は五十ぐらい、頭が少しく禿げて白髪が混った、丸々と能く肉付いて皮膚の色がつやつやとして居る。眉と云い、目と言ひ、始終にこにこと言うに言われぬ優しい笑顔を見せて人に接しられる態度と言ひ、余は会つて如斯円満なる、玲瓏として玉の如き人格と、其優しい温容と、一点批難す可き点のない完璧なる態度とを有した人に、臍の緒切つて以来会つたことがない。好い人である。実に好い人である。余は、吾が文壇に魯庵氏の如く、態度も備わり、一家の見識もあり、そして正直で、優しい、心の美しい人の無いことを断言する。

魯庵氏は人格として完全円満な人である。心と行いと相同じく、其心のみを拵げて見せても、決して人の前に耻じるが如き疚しさのない人である。人として美しき心は、其顔に現われて居る。如斯人に、何うして人の前に耻ずるような心の罪が犯せよう。由来、小説家とか、文士とか云う連中は、神経質で、僻みや嫉妬心が強く、拗ねた皮肉な根性で、人を忖度する心が強く、女のように厭味なものである。殊に近代思潮の影響を受けた現代人になると、極端に然うした悪魔的暗黒面が尖って発達して居る。人を信じ、人を頼る、人間自然の美しさが全く



欠けて居る。僻み、嫉妬、猜疑、忖度、廻り気の白い目で、絶えず人を見、人生を見て、天真にして愛すべき所がない。現代人の有する所は、疑いである。呪いである。憎しみである。美しい悦びと、祝福とは現代人の胸になり。如斯は時代の罪か、現代人それ自身の罪であるか、茲でそんなことを詮議する必要はない。兎に角吾等の世に、未だ見ざるものを誠として信じ、人の喜びを、祝福する美しさの亡びたのは、花の吹き鳥の謳う春の長閑さを失った自然のように淋しいものである。彼れ等の人を見る目、それは、実に憎む可き獣の眼である。恐る可き

悪魔の眼である。悪魔！　悪魔？　現代人の心は悪魔である。

恐ろしい悪魔の其中に、吾が魯庵氏の如く、天真円満なる人のあるのは実に嬉しい。余は如斯人に接することが好きである。とは云うものの、魯庵氏も同じく人間であり、同じく現代の空気を呼吸し、現代の思潮の中に、動揺して居る人であって見れば、ダークネツスな色を帯びた現代人通有なる悪魔的性質が、其血の中に混じて血管を廻って居るに違いない。而もそれが、現代人の如く露骨に現われないのは、その高い人格に依って陶冶され、

掩われて居るのである。

魯庵氏は識見の高き人である。現代の思潮に触れながら、而も之れを達観し、批評して行く人で、決して其渦中に巻き込まれてあえぐようなことはしない。現代思潮に触れ得ざる人ではない。触れて而して批判し、理解して居る人である。

漱石氏は、所詮現代思潮の悪魔的傾向に触れることは出来まい。触れることは出来ぬから従って現代人の傾向に対する理解もない。漱石氏は全く現時代と没交渉で、其体には現代人の胸に通う血とは、全然別時代の血が通

って居る。漱石氏は何うしてもロマンチック、乃至クラシックの人である。吾等との交渉は全く無いと言って好い。其所へ行くと魯庵氏の思想は吾等と余程接近しても居るし、且つ密接なる交渉もある。

漱石氏は床の置物である。飾って置けば賑かでもあるし、疲れた時些いと見れば退屈凌ぎになる。然し、魯庵氏は未だ、床の置物ではない。まだまだ時代と交渉ある生活の充分出来る人である。床の間の置き物たる漱石氏が現時の文壇に活動して、現代と交渉ある活動の出来る魯庵氏が、沈黙を守って居ると云うのは、主客転倒で

はあるまいか。此の人をして、今のままの沈黙に居らしめるのは、如何にも惜しい。余は魯庵氏の活動を切に望むものである。批評家としても現代の群小批評家に卓越せる識見がある。作家として縦横の才がある。翻訳家としての学識もあれば、細心なる忠実もある。何れの方面に活動せらるるも、決して現時の文士諸君の後に居る人ではない。

魯庵氏は亦極めて座談に巧みだ。余は曾つて氏の如く、話材の多く、而も何物に対しても卓れたる一種の見解を有せる人を見たことがない。客に接して一分時と雖も、

決して沈黙せらるるが如きことはない。すらすらとして流るる如き巧みなる弁舌は、其唇を衝いて絶えず滑って居る。然し、饒舌とは全然其意味が違ふ。同氏の口を衝いて縷々として出ずる所の座談は、皆、立派な論文である。座談は直ちに文章である。先天的に弁舌の巧みな人で、一言と雖も、一句と雖も、渋ったり、行き詰ったりしない。円転滑脱、縦横自在なもので、吾等如き後進に向つても、吾が見解を縷々として説いて倦まない。之れを聞く人も決して其長きに倦むが如きことはなく、傾聴して居る間に、縦しそれが自分の意見とは反対であつて

も、頷かずに居られない。魯庵氏は真に座談の天才である。魯庵氏に一度び接した人は、必ず其巧みなる座談に魅せられて了うであろう。

魯庵氏は客を喜ぶらしい、其麼忙しい時に、如何なる人が訪問しても、必ず之れを迎えて快く話される。そして話の中に、実の円滑なる皮肉の妙を見る。魯庵氏の如く遠廻しに、巧みなる皮肉を云う人は少い。余は漱石氏の皮肉よりも、寧ろ魯庵氏の皮肉を愛する。漱石氏の皮肉は、真面目くさった面をして言う皮肉である。魯庵氏の皮肉は、笑いながら言う皮肉だ。

繰り返して言う。余は魯庵氏が好きである。たまらなく好きである。

見える。髻髯として目に見える。其頭の禿げた、少し白髪のある、二重瞼の目尻の下り気味な、肉付と血色との好い、丸い艶々とした顔に、絶えずにこにこと浮ぶ其人懐かしい笑顔、するすると巧みに滑る其の弁舌、其齒、其唇、其態度、絵に見る七福神の布袋を今少し痩せさして、締りを付けたような其姿、思っても懐かしく吾が目  
に浮ぶ。







日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館